

## 10月7日 年間第27主日

ハバ 1:2-3, 2:2-4    IIテモ 1:6~14    ルカ 17:5~10

### 1. ルカ

ファリサイ派の人々や律法学者を非難する物語りの後に、今度はイエスの弟子たちへの教えがしばらく続きます。彼らは神の民の管理人にふさわしく行動していませんでしたが、それに対してあなたがたは…という対比の形で、イエスは弟子たちに教えを語られます。これらのテキストは、恐らく初代教会における司牧的な体験を反映しているものと思われます。ですからそれらの教えは、当時使徒たちによって会衆への説教を通して語られたものであって、決してイエスと使徒たちだけの間の私的な(特権的な)対話と考えるべきではありません。

教会の課題は、キリストの福音を宣べ伝えることであって、すべての信者がその目的のために“分に應じて働く”(エフェ 4:16)者となるように、これらのイエスの教えが説教で語られました。カトリック教会はそのことを確認して次のように教えています。「信徒の使徒職は教会の救霊活動そのものへの参与であり、すべての人は洗礼と堅信を通して主自身からこの使徒職に任命される。」(教会憲章 33)

v.6 「からし種一粒ほどの信仰があれば、……」

福音の宣教がはかどらないとか、困難に見えるとき、昔も今も人は何故だろうと考えるものです。原理主義的な傾向の人々は、自分たちの信仰の力の不足が原因であるから、もっと強い信仰の力を持つべきだと考えるかも知れません。しかし信仰は神に対するものであって、宣教の困難という桑の木を動かす力は、神のものであることに信頼するのが、“からし種一粒ほどの信仰”なのです。

そして、福音を宣べ伝えることは聖職者と呼ばれる人々に任せて、信徒はキリスト教的な文化や生活様式を広めるといような別のことをしていればよいと考えるなら、畑から帰ってきた僕に主人は「夕食の用意をしてくれ」と、直接自分に仕えるもう一つの仕事を求めることでしょう。それが福音を宣べ伝えること、信徒が自らも“分に應じて”福音を語ることです。「お前はその後で食事をしなさい」(v.8)という主人の言葉によって“信徒の使徒職”(教会憲章 33)に気づき、「取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」(v.10)と言えるようになることを、天上のキリストは私たちに期待しておられます。

### 2. IIテモ

福音は「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)であって、神から私たちに“ゆだねられている”(w.12,14)ものです。それは使徒たちから代々の教会に受け継がれて来ました。

近代のキリスト教の中には、“福音のために共に苦しみを忍ぶ”(v.8)ということ、人間が自らの能力と努力によって地上に理想の社会を実現することだと考える人々がいます。そのような人々がよく口にする言葉は、“地上に神の国を建設する”というものです。しかし使徒パウロは、福音が“土の器”のような弱

い人間に委ねられたのは、「この福音の並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるため」であると言いました(IIコリ4:7)。

私たちに求められているのは、福音を告げ知らせることであり、“しかも、キリストの十字架が空しいものになってしまわぬように”(Iコリ1:17)、人の知恵によらずに宣教することです。そのためには、信徒一人一人が教会に受け継がれて来た福音を、自ら学ぶという自覚を持たなければなりません。聖書を学ぶことは、どんな政治活動や社会活動と較べても、はるかに大切なことなのです(ロマ6:17、Iコリ11:2, 15:1-4、ガラ1:8-9、IIテサ2:15、IIテモ2:2, 3:14)。

### 3. ハバ

2:4 「しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

預言者は、世の中の暴虐と不法、争いと対立を、神に訴えて助けを求めました。しかし、それに対する神の答えは、救済史の完成は神に属するというものでありました。人間が世の中に対して、自らの裁きと支配によって解決を与えようとするとき、神は「しかし、彼らは罪に定められる。自分の力を神としたからだ」と言われます(1:11)。

2:2 「主はわたしに答えて、言われた。“幻に書き記せ。走りながらでも読めるように、板の上にはっきりと記せ。”」

福音を告げ知らせるとは、そういうことなのです。カトリック信者であると自認しながら、自ら福音の何たるかを知らず、たとえ語っても聞く者に理解されないようでは、忙しい現代人が“走りながらでも理解出来る”宣教にはなりません。この“聖書の学び”が、“救済史の完成は神に属するのだ”という信仰によってこれをひもとく人々を、「欺くことはない」(2:3)と、私は期待しています。

アーメン、ハレルヤ。

## 10月14日 年間第28主日

王下 5:14～17    IIテモ 2:8～13    ルカ 17:11～19

### 1. ルカ

v.17-19 「イエスは言われた。“清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。” それから、イエスはその人に言われた。“立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。”」

この“救った”と訳されているギリシア語の“ソーゾー”という動詞は、危機や病気や苦しみからの“いやし”という意味にも、またイエス・キリストによる“救い”の意味にも使われている言葉です。この前者の例が マタ 9:22 やこの ルカ 17:19 で、例えば THE REVISED ENGLISH BIBLE(1989)では“healed you”、“cured you”となっています。

近年わが国でも“いやし”に似た“癒やし”という言葉がたいへん流行して、これを何らかの形で取り入れることが、多くの人々の生活のパターンと考えられるようになりました。そして、宗教や信仰もこの“癒やし”というものの一種として見るような、そんな傾向が目につきます。このような考え方は、恐らく西欧キリスト教世界に古くからあったもののようですが、それが“癒やし”という流行語になったのは比較的最近になってからです。

特に新約聖書において、この語がイエス・キリストによる“救い”の意味で用いられている場合にも、むしろこれを“癒やし”と読み替えると、多くの人々にとっての通俗的なキリスト教理解に近くなります。例えば ロマ 8:24 は「私たちは、このような希望によって癒やされているのです」となり、エフェ 2:5,8 は「あなたがたの癒やされたのは恵みによるのです」「あなたがたは、恵みにより、信仰によって癒やされました」となります。これなら聖書がよく分かる、と思う人がきっとたくさんいらっしゃることでしょう。

### 2. ルカ

重い皮膚病をいやされた“ほかの九人”にとっては、“いやされた”ということがすべてであって、彼らはそのまま去って行きました。ところが“神を賛美するために戻って来た”一人は“救われた”、というのが福音書の本来の意図なのです。初代教会にとっても、使徒たちにとっても、“福音”とは“イエス・キリストの救いの知らせ”でありました。新約聖書は、使徒たちによるこの福音の宣教の伝承なのです。ですから公式な教会での朗読を前提に翻訳された“新共同訳聖書”では、マタ 9:22 でも ルカ 17:19 でも、「あなたの信仰があなたを救った」となっています。そして、それは適切なのです。

### 3. IIテモ

v.8 「わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたので

す。」

これは恐らく、初代教会で用いられた信仰宣言文からの引用と思われます(ロマ 1:2-4 参照)。教会が神にささげる賛美も、信仰宣言も、それは主キリストの再臨の日まで、私たちが“待ち望みながら”(ロマ 8:23,25、フィリ3:20-21 参照)継続して行く行為なのです。ただ過去に一度起こっただけの思い出話として、聖書が“癒やし”の物語りを伝えているのではないのです。

聖書が伝えているのは、イエスが奇跡によって単に重い皮膚病の人をいやされたという思い出話ではなくて、それによって福音を信じた一人を「罪と死との法則から解放した」(ロマ 8:2)ということ、そして彼が「キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる」信者として(v.11、恐らく当時の洗礼式の賛美歌の一節)歩み始めたという事実なのです。

#### 4. 王下

シリア人ナアマンは、イスラエルの預言者エリシャによって重い皮膚病をいやされました。しかしこの話は、ナアマンがそれをたいへん喜んで、お礼の贈り物を差し出したという単なる奇跡物語りではありません。そうではなくてナアマンが、それ以後の生涯を通じてイスラエルの神を礼拝する者になったということ、ただそのことだけが重要なのです(ルカ 4:27 参照)。

ひとときの“癒やし”ではなくて、主の再臨と私たち救われた者たちの復活の日を待ち望む教会の信仰を、主日のミサとその中での朗読配分から、今朝も会衆一同が聞き取ることが出来ますように。

アーメン、ハレルヤ。

## 10月21日 年間第29主日

出 17:8～13    IIテモ 3:14～4:2    ルカ 18:1～8

### 1. IIテモ

4:1-2 「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスのみ前で、その出現と御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。」

新約聖書の使信は、古い昔の世界観に基づいて語られていて、それは現代人の世界観と相容れないから、そのまま受け入れることが出来ないのだという議論が、20世紀の中頃から盛んに論じられて来ました。それは真面目な神学界の論争でありましたが、実際には、一般のキリスト教信者たちが抱いている“自分の信仰への不安感”や“聖書への不信感”を、弁護する口実を提供する結果になったように見えます。

難しい神学論争は専門家たちに任せるとして、普通の信者は“使徒たちが信じたように信じる”という姿勢で聖書に向かうのが、いちばん確かな福音理解への早道なのです。疑ったり、理屈を付けて反論しては、“使徒たちが伝えたこと”を理解出来るわけがありません。

使徒たち自身も、キリストの再臨や神の国の到来について、科学的学問的に説明したり証明したり出来はしませんでした。しかし、彼らは聖霊の働きと、復活の主に導かれて、“受けた福音”(ガラ 1:11-12)を宣教したのです。ですから、それは神からの福音であって、この世の知恵や学問の産物ではありませんでした。どんなに時代が隔たっても、私たちが“使徒たちが信じたように信じる”という姿勢で聖書に向かうことは可能であり、それがいちばん確かな福音理解への早道です。私たち教会が使徒たちから受け継いだ福音は、イエス・キリストの出現とその御国とを思いつつ、語られまた聞かれねばならないのです。

### 2. ルカ

「神は速やかに裁いてくださる」(v.8)とは、12:32の「恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」(12:32)と同じことであつて、「昼も夜も叫び求めている」(v.7)という表現も、12:31の「ただ、神の国を求めなさい」に対応します。

キリストの再臨と神の国を待望している初代教会の人々に向かって、使徒たちは“目を覚ましている信仰”(12:35-48, 21:34-36)の大切さを語りました。「人の子が来るとき」(v.8)を待つ心の緊張が、失われたいためです。イエスが語られたこの譬え話を用いて、使徒たちが当時の教会に伝えた通りに、現代の信者もその使信を聞くということが大切です。

時代は変わり、それによって世界観も変わり続けます。地が平らであったり、天体が地球の周りを動いていた時代の方が、キリストの福音は理解しやすかったのでしょうか。現代人でも、太陽が東の空に昇り、西の地平線に沈むと言っているではありませんか。古代の世界観が現代の科学から見て正しくないという理由で、当時の世界観で表現された福音の使信が無効になったりはしないのです。カトリック国フランスで、19

世紀最大のベストセラーとなったルナンの“イエスの生涯”以来、今日に至るまで数多くの“新しい解釈によるイエス物語り”が書かれてきましたが、一冊として、キリストの福音そのものを伝えることには成功しませんでした。

いつの時代でも私たち信者は、使徒たちが当時の教会に伝えたとおり、そのままに使信を聞くということによって、最もよく福音を受けることが出来るのです。疑ったり、理屈を付けて反論しても、それでもっと分かりやすい福音を見つけることは出来ません。

### 3. 出

旧約聖書の最初の五書(トーラー)が文書化された時代には、このアマレクとの戦いの物語りは既に古い伝承であって、その経緯や意図が何であったかは忘れ去られていました。ただ、主の旗(17:15)に向かって手を挙げていることの大切さを、イスラエルの共同体はその朗読から聞かされたことでしょう。“主の御座に背いて手を上げる”(17:16)ことが罪であり、“主の旗に向かって手を挙げている”ことが信仰であるという使信を、現代の私たちでも十分に理解することが出来ます。なぜなら、信仰とは神の救済史の御手に信頼し期待することだからです。

「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ3:20)

「あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」(1ペト 1:21)

アーメン、ハレルヤ。

## 10月28日 年間第30主日

シラ 35:15b~22a IIテモ 4:6-8,16-18 ルカ 18:9~14

### 1. ルカ

福音とは？ その福音への信仰とは何ですか？ という問いへの答えを、教会はいつの時代にも、聖伝と聖書によって保持して来ました。福音については、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」と言い(ロマ3:23-24)、洗礼を受けた人々については、「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放した」と聖書が述べています(ロマ8:2)。信仰については諸信条が共通して、「罪の赦し、からだの復活、永遠の命を信じます」と宣言しています。

キリスト者の祈りの主題は、いつも罪と死からの救いに向けられていなければならないことを、今朝の福音書のテキストは私たちに教えています。信仰によって義とされ(ガラ2:16、ロマ1:16, 3:22)、ミサの祭儀に参加する者となっている人々について、イエスは「永遠の命を得、… 終わりの日に復活させる」と約束してくださいました(ヨハ6:54)。

私たちはいつもミサの初めの部分で、“主よ、あわれみたまえ。キリストよ、あわれみたまえ”と歌います。しかし私たちは実生活においては、自分がキリスト者であるということで、しばしばうぬぼれたり高ぶったりしていることがあるのです。この譬え話の中のファリサイ派の人は、もしかすると私たち自身の姿なのかも知れません。どうか主が、現代の教会をそのような思い上がりから守って、謙遜にしてくださいませうに。

### 2. IIテモ

v.8 「今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。」

使徒パウロはローマで、自分の殉教の日が間近に迫っていることを思って、弟子のテモテに書き送っています。キリストが来られる「かの日」に期待しつつ、裁判における彼の弁明を通してさえも「福音が宣べ伝えられ、…人々がそれを聞くようになるために、主が力づけてくださった」(v.17)ことを、感謝しました。信仰者の人生を競技に例えつつ(v.7, Iテモ6:12, Iコリ9:24 参照)、福音の目標をしっかりと目指して走ることの大切さを語りました(フィリ3:14 参照)。

福音とは？ その福音への信仰とは何か？ という問いに、今も使徒たちが聖伝と聖書を通して答えてくれています。しかし、もし多くのキリスト者の心に「覆いが掛かっている」(IIコリ3:14-16)なら、これを正しく理解することが出来ません。代々の教会はいつもミサをささげ、多くの信心業に励んで来ました。しかしそ

れにも拘わらず、歴史の教会はしばしば福音への正しい信仰と理解ではなくて、それに代わる時代精神や各種のイデオロギーによって発言したり行動したりして来たのです。

使徒パウロの、殉教を目前にしての福音証言に耳を傾ける私たち現代の教会は、あの取税人と共に、遠くに立って、…胸を打ちながら、“神様、罪人のわたしを憐れんでください”と、祈ろうではありませんか。それは、信徒一人一人が自ら聖伝と聖書に耳を傾けて、「主キリストの方に向き直る」(II コリ3:16)ことによってこそ、可能になることでしょう。

### 3. シラ

v.15 「主は裁く方であり、人を偏り見られることはないからだ。」

イエス・キリストの福音、罪と死からの私たちの救いへの“教会の信仰”を宣言するために、信条は次の言葉を含まなければなりませんでした。“主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。”現代のキリスト者は、ここで聖伝に出会うのです。

残念ながら、我が国のカトリック教会の“洗礼式の信仰宣言”には、この部分が欠けています。このために我が国の主日のミサでは、“使徒信条”または“ニケア・コンスタンチノーブル信条”を唱えることが、公式に推奨されています。

自ら聖伝と聖書に耳を傾けることに、カトリック教会の信徒一人一人が熱意を持つことを、天上のキリストは今朝の朗読配分を通して呼びかけておられるのです。

ハレルヤ、アーメン。